

北国街道と宿駅しゆくえき小松

「北国街道」とは、北陸道諸国を「北国」と総称したことに因み、中山道か



かつての長田町往来(小松市立博物館提供)

ら分岐して近江・越前・加賀・越中を経て越後に至る街道を指し、さらに越後直江津から信濃追分まで再び中山道に連絡する。小松を通る街道は「上街道」「上通」と呼ばれたが、これは京都を意識した通称とみてよいだろう。

北国街道は金沢方面から、高堂村→荒屋村→島田村→梯出村→小松町→三日市村→須天村→今江村→串村→四丁町村→月津村→矢田新村と通過して大聖寺藩領へと延びていた。

また現在でも小松市中心部の町並みは宿駅の面影が残るが、京町の九津屋次郎左衛門は本陣を勤め、幕府巡見上使等が宿泊した。また伝馬のための馬匹五〇疋が置かれ、



串茶屋一里塚(浮見駒太郎画『江戸の姿を今に伝える小松の自然と年中行事二十八景』)

宝 永二年(二七〇五)、金沢との間に十



上街道中絵図(石川県立歴史博物館所蔵)



旧北国街道(大川町)の現在の様子 前方には梯川が流れている

度飛脚が整備された。
上街道を通行したのは巡見上使だけではなく、藩主が江戸から帰国する際にも使用された。ただし、この例のように藩主が上街道を使用したのは藩政期を通じて四例をみるに過ぎないが、安政五年(一八五八)二月、前田斉泰まえだなりやすが江戸から帰国にあたり東海道へ上街道を通行することになったため、これに随う者たちのために『江戸より金沢



月津一里塚

上道中絵図』が作成された。小松市域に関連する箇所を拾うと、串村・木場潟・琴湖(今江潟)・那谷寺観音・小松城など街道近辺の名所について触れられている。
この他『小松旧記』をひもとくと、遊行上人や京都の公家・諸藩の大名・東西本願寺の使者等の通行・宿泊も確認され、小松が繁華な宿駅であったことが理解できる。(石田文二)